

# 晩年のロレンス

——孤独から神話的コスモスへ——

鈴木俊次

## 1

D. H. ロレンスは英国社会に受け入れられず、作家生活の大半を国外で費した孤独な作家であるだけに、他者との関わり、社会との関わり (social instinct) には非常な関心を持ち、反面その反動として強い疎外感を抱いていた。例えば、それは『虹』におけるヴラングウェン家の女達を代表するアーシュラの苦悩の中に見事に描かれている。このことは、G. H. Ford も指摘するように、<sup>1)</sup> ロレンスの性格の中核には、その表面上の魅力とか親しみ易さにもかかわらず、鋭い孤独の感覚があったために、反動として彼は愛とか人間関係とかを中心のテーマとして考えたといえるのである。ロレンス自身『『チャタレイ夫人の恋人』にことよせて』 ('Apropos of *Lady Chatterley's Lover*') という論文の中で、「私に近づいてくるいかなる人間も私の存在そのものを脅かす。いや、もっと極言すれば、私の実在そのものを脅かすのだ。」<sup>2)</sup> とか「各人は他者にとっては脅威となる。」<sup>3)</sup> と告白しているのである。ここに我々は J. Moynahan が結論的に指摘するような、<sup>4)</sup> ロレンスに内在する相反する二つの衝動、即ち、生 (life) を新たに確立しようとする衝動ないしは新たな世界の確立への願望と、社会から逃れて、その病める人間社会を破壊してしまいたいという衝動 (それを我々は『恋する女達』の主人公パーキンの中に、あるいは『チャタレイ夫人の恋人』におけるメラーズの中に色濃く感知することができる)、の源を見出すことができると思う。ロレンスの晩年における課題とは、こうした己れ自身に内在する鋭い「孤独感」(the sense of isolation)<sup>5)</sup> を、いってみれば20世紀の作家達が多かれ少なかれ苦しんだ問題を、いかに解

決させるかということ、ロレンスの言葉でいえば、個我 (individuality) に縛られた現代人の意識をいかに解放させるのかという問題であった。性の問題も、神話的コスモスとの交流といったテーマも、そこから派生してくるものである。ロレンスが『翼ある蛇』 (*The Plumed Serpent*) や『馬で去った女』 (*The Woman Who Rode Away*) 等において描いたメキシコ原住民の信ずる異教神への共感とは、こうした現代人に共通する孤立感を解消させてくれる血的な意識 (blood-consciousness), 古き共同体意識 (a sense of togetherness) への彼の限りない憧れの産物であったといえる。

だが、このメキシコ原住民の世界と西欧文明に育った作家の意識とは現実的には相容れないものがあるのは当然である。1926年9月、ロレンスは再び彼の故郷、ティンガムとダービィを訪れる。彼がそこで見たものは英国各地に起った炭坑ストライキに代表される母国英国の混乱であった。それは彼をして英国の未来への絶望と母国からの訣別を決意させるに十分であった。それはまた、ロレンス自身の健康への不安や妻フリーダとの不仲といった個人的側面と重って彼に八方塞がりの感を抱かせ、彼の孤独感を一層助長したと思われる。そのため、1926年から1928年頃までに書かれた作品には、孤独への徹底とそこからの解放というテーマが内在しているのである。

## 2

『島を愛した男』 (*The Man Who Loved Islands*) という短編を書いた時期のロレンスは、もっとも沈んだ気持ちになっていた時ではあったが、既に、この作品にみられるような家庭を含めた社会からの離脱、隠遁といったテーマに通ずるものは『馬で去った女』にも見ることができる。『馬で去った女』において、女は2人の子を持つ中年の母親であったが、彼女は家族を捨ててメキシコの山間インデェンの部落に「1人で」行き、その異教神に自らを献げる。この中で女は息子の問う、「お母さん、何故あなたは1人で (alone) そこに行くの？」<sup>4)</sup> (下点筆者) という質問に対して、ヒステリックに「私は一時たりとも1人にさせてはもらえないというの？ 私の人生のほんの一時でさえ

も？」<sup>7)</sup>と反問する。この女の反問の中に我々は『島を愛した男』への序曲を察知することができると思う。ロレンスの晩年の足跡を中短編を中心に概括するならば、『馬で去った女』、『島を愛した男』、『死んだ男』という順序で、それらが fable としての、あるいは神話的な物語としての深まりの中に、symbolism への傾斜の中に辿ることができよう。

『島を愛した男』の内容検討に入ろう。物語の主人公である男は「総て己れ自身のものである島」<sup>8)</sup>を造り、その己れの世界の中で少しばかりの召使いや森番、作男、大工達と平和な人生を送りたいと願っていた。この男の抱く願望は作者ロレンスの抱いたラナニム構築の夢と重っていたことは明らかであるが、ラナニムの挫折を反影するかのように、男が現実にかうした自己のユートピアの実現を図ると、人間関係の失敗と財政面の破綻から、もろくも崩れてしまう。それは男が自己の「善意」(good-will)とは他者にとっては「一種のエゴイズムの変形」(p. 727)にすぎないことを知らなかったからである。この問題は『死んだ男』においては、イエスにみられる所の、生前における愛の説教者として「善意」を他者に押しつけたことへの徹底した嫌悪となって表現されている。『島を愛した男』の主人公は自己と他者との関わりを減らすべく、「第二の島」(the smaller land)に移り、忠実な老大工や未亡人とその娘だけとともに住む。狭められた他者との関わりに呼応する形で、第二の島の緑は減って、「灰色の無色透明な岩」や「灰色がかった薄暗さ」が支配的となる(p. 734)。この「灰色」や「無色透明」な色彩とは、中間的世界、「白色」が支配的となる第三の島への中間点を暗示するものである。

男は第二の島でも、未亡人の娘との「機械的な交わり」の結果として、結婚を余儀なくされる。男は『馬で去った女』の主人公と同様、家族のもとを去って、ついには「ただの二、三エーカーの岩だらけの島」(p. 738)に猫と羊だけを連れて住むようになる。男には今や「木」(生命の象徴)の存在すら苦痛であったのだ。男が自己の personality で己れの世界を満たそうとすれば、存在する生き物総てが障害となり、他者との関係は不可能になってしまう。男が第三の島に移り住んだ時、「冬」(死と結びつく)が到来し、「白い」雪に閉ざ

されて、男は己れの内面において“dissolving” (p.742) を味っている。

これまで考察してきたように『島を愛した男』では、島の規模（大から小へ）、色彩の変化（緑から灰色、そして白色へ）、季節の推移（春から冬へ）といったものと男の内面への沈潜の過程の間には象徴的な相関関係が認められ、それは結局の所、孤独の究極は「死」しかないことを暗示するものである。当然ロレンスはこの『島を愛した男』に対する解答を必要としたはずで、それは『チャタレイ夫人の恋人』と『死んだ男』を待たなければならない。

### 3

『チャタレイ夫人の恋人』の中でロレンスが唱えた精神と性（肉体）の調和といった問題については、今さら論ずる資格は筆者にはない。ただ、ここでは本稿のテーマと関連してメラーズが軍隊を退いて（社会生活の拒否）、その後「1人で」森の中で誰の干渉も受けずに生活しようとしていた点から中心的に考察してみたい。これは『島を愛した男』の主人公とあまり隔らない地点にメラーズがいることを物語っているわけで、こうした隠遁生活の意味と、そこからの解放という問題に対して、この小説においてロレンスはいかなる解答を与えているのか。もう一つは作品構成の面からみて、リアリズム描写とこの小説のもつ神話的、象徴的構造のもつ意義はどこにあるか、<sup>9)</sup> といった問題を関連的に考察することである。

『チャタレイ夫人の恋人』はよく指摘されるように、その作品構造の面で、プロット展開の面で、極めて明確で simple であるという点で際立っている。物語の背景は炭坑町ティバーシアルを舞台に、炭坑経営者クリフォードとその妻コニーの住むラグビー邸と、ラグビー邸の森に住む森番メラーズを守護者とする森、登上人物もクリフォードとメラーズを二つの極として分割できよう。この物語の展開は、いってみれば「生」と「死」という究極的な価値に限定されてくる相対立するものの中で、主人公コニーが「死」（ラグビー邸とクリフォード）から「生」（森とメラーズ）へと移行する過程を描いたものといえる。

このコニーの再生過程において森は『島を愛した男』における三つの島の光

景がもっていた象徴的な機能と同様の機能を備え、コニーの内面の変化に呼应している。クリフォードとの「空虚」で「何にもない」(nothingness)な生活から逃れるための「避難所」としての森とは、コニーは十分な触れ合いが得られない(第三章)。

「……ラグビー邸から逃れること……コニーはこの邸から、総ての人々から逃れなければならなかった。森は彼女にとっての避難所であり、聖堂であった。

しかし、それは必ずしも避難所であり聖堂でさるといふわけにはいかなかった。なぜなら彼女は森と何ら関係をもたなかったから。……彼女は決して真に森の精霊(spirit)と触れ合いをもったことがなかった。」<sup>10)</sup>(下点筆者)

メラーズとの触れ合いをもつまでのコニーにとって、森とは、ちょうどメラーズにとって森が人間社会からの「避難所」となっていたように、クリフォードの世界からの避難所としての役割しかもっていない。「森の精霊」というコスミックな生命的存在との交流は不可能なのである。森はコニーにとって自己の孤独を慰めてくれる所にすぎなかった。コニーがクリフォードに代表される上流社会にあって孤独であるのと同様、コニーの内面に一つの転機をもたらす森の中でのメラーズの水浴場面(pp. 111~112)において彼女が感ずるものは、メラーズのもつ「孤独感、純粋に孤独な生き物のみがもつそれ」(p. 112)、即ちメラーズに内在する純粋な孤独感、己れもまた孤独である者のみが理解し得るものであった。2人は、いわば現実の社会(リアリズムの世界)から疎外された存在、森という神話的世界の中でしか真の純粋な生命の交流と再生を果し得ない人物なのである。この点に関する不満、即ち作品構成上リアリズムの世界とシンボリズムの世界が分断され、メラーズの現代文明批判という社会的な側面に対する真の問題解決になっていないという批判がこの小説に向けられるのは一面妥当であるようにみえて、必ずしも納得できるものではない。<sup>11)</sup>

ロレンスはメラーズのように、あるいは『島を愛した男』の主人公のように、「1人で」社会から逃れて、自己の孤独の中で生きることの意義をどう考えていたのであろうか。ロレンスは1922年 C. Carswell に宛てた書簡の中で

次のように述べている。

「僕は思うのだが、人は一瞬でもよいから世間から遠ざかり、真実のものである内面のリアリティに向かわねばならない。そして、多分その後には世間に復帰しなければならぬ。その時、人は心静かで確信に満ちていることができるのだ。僕は世間というやつにはうんざりしているんだ、……。」<sup>12)</sup>

ロレンスにとって内面のリアリティを見つめ直すためには、孤立は一面では必要なことでもあるのだ。だがその後には、社会への、もっと狭義には他者との、新たな関係を回復させなければならない。この他者との関係、それも男女の間における「男根的やさしさ」(phallic tenderness) を基礎とする生き生きとした関係を確立することこそが、この頃のロレンスにとって孤独からの解放、生への方向転換を可能にする鍵であったのだ。話をコニーとメラーズに戻そう。コニーがメラーズの鶏小屋の前でひな鶏を見て、生命の暖かさ、やさしさ、そして自己の生活の不毛さに気づく有名な場面 (pp. 161~165) は、コニーの再生への直接的な契機となっているが、この場面に至るまでに季節も春に近づき、コニーは次第に森の中に春の女神 Persephone の息吹きを感知できるように変化している (p. 131)。コニーが「生命の新たな誕生」(p. 186) という再生感を味うのは、メラーズとの、森の中における三度目の交わりにおいてようやく可能となる。この時メラーズは、コニーの孤独と肉体的、精神的死の状態からの救済者となり、逆にメラーズにとってもコニーは自己の孤独からの救済者となっている。こうした個人の救済といった問題と社会のもつ問題への解決法との関連について次に考えてみようと思うが、これは結局の所、作品構成上のリアリズムとシンボリズムの扱い方という問題にも関連してくると思われる。

『チャタレイ夫人の恋人』におけるロレンスの文明批判(社会的側面)が十分解決されずに終わっているという点に関して、S. Sanders は次のように指摘する。

「ロレンスが実際に性的な愛 (sexual love) が世界を変革するのに役立つというロマン派的な信念をもっていたにしろ、もっていなかったにしろ、この

小説の最終稿は個人的再生 (personal regeneration) と社会的再生 (social regeneration) の間の関連を解く鍵をほとんど与えていない。」<sup>13)</sup>

既に少し以前に触れたことだが、この指摘は必ずしも納得できるものではない。第一に社会的再生とは個人的再生ということが前提となるのでなければならない。1926年に訪れた英国の現状に対する危機意識がロレンスをしてこの作品を書かせる動機になったとすれば、そこに社会的側面からの文明批判が前面に出てくるのは当然の結実である。メラーズの文明批判、現状の英国への絶望観の因はここにある。

「僕は世間を信用していない。金銭も、進歩も、僕達の文明の未来も信じない。もし人類に未来があるとすれば、現在ある状態とは全く異った大変革 (a very big change) がなければならぬだろう。」(p. 336)

メラーズのいう「大変革」が政治的・社会制度上の改革を文字通りには意味しないことは明らかであり、そうした面でのロレンスの挫折は『カンガルー』(Kangaroo) 以後の一連の小説の失敗と、1928年の W. Bynner への有名な手紙<sup>14)</sup> が物語っている通りである。作家であるロレンスが何らかの変革を文学を武器にして期待し得るとすれば、それは現代人の意識面での変革、価値観の転換を促すこと以外にはないはずである。このことは1928年、C. Wilson 宛てた彼の手紙が雄弁に物語っている。

「僕達はお金とか労働という名による革命なんかじゃなく、生 (life) という名における革命を望んでいるんだ。……マルクスの社会主義やソヴィエト流の死せる物質主義などは僕には僕達が今もっているものと大差ないように思えるのだ。僕達が望んでいるのは生であり信頼であると思うのです、……」<sup>15)</sup>

ロレンスにとって信じられるものとは何か、それは他者との関わりにおいて重要な「生」であり「信頼」であった。『チャタレイ夫人の恋人』にあっては、それはメラーズとコニーという男女間の生命的な「やさしさの触れ合い」(the touch of tenderness) (p. 338) という言葉で表明されている。それがまた、我々の現代人のような「半分意識的で半分しか生きていない」(p. 337) 者達を再生させる鍵であり、それがまた現代社会の未来へ期待をつなく糸であった。

ロレンスは現代人のもつこうした社会的問題（リアリズムの世界）を作品の上で解決しようとする時、象徴的神話的な方法を、それも『虹』や『恋する女達』におけるよりもはるかに意図的に、使用せざるをえなかった。ロレンスがメラーズ、コニー、クリフォード、森、ラグビー邸、ティバーシャルの炭坑町、といった明確な象徴的人物および背景を用いたということは、ロレンスが危機的に捉えた英国社会の現実を、人間の普遍的な倫理上の問題、即ち人間の実存に関わる問題として捉え作品化しているからに他ならない。そこに神話的な物語構成への傾斜の因があったのだ。さらに付け加えれば、メラーズもコニーも産業文明が支配的な社会（リアリズムの世界）では、己れがもっとも重視する内面の「リアリティ」を喪失してしまうことを本能的に理解していたために、2人は現実の人間社会から隔離された森という神話の世界に逃れて、互いの孤立感を癒し合い再生せざるをえなかったということなのだ。かくて、第一稿から最終稿<sup>14)</sup>に向うにつれて、神話的色彩は強まり、この傾向は『死んだ男』に至って頂点に達するのである。

## 4

『死んだ男』(*The Man Who Died*) は二部から成り、第一部は『島を愛した男』とほぼ時を同じくして書かれ、第二部は少し遅れて書かれたために、第一部と第二部の tone は対照的であり、第一部のテーマは『島を愛した男』との、あるいは『チャタレイ夫人の恋人』におけるメラーズの人間嫌悪と孤独な生活との願望との類縁性が明白である。第二部は『チャタレイ夫人の恋人』のテーマと文字通り結びついてくる。

第一部ではエルサレムの近くで百姓夫婦の飼っていた若い雄鶏（「死んだ」男の生命力の象徴）が夜明け（再生への暗示）とともに脚の紐を切って逃げ出す（復活への旅立ち）。これと呼応する形で「死んだ」イエスと思われる男が長い眠りから醒める。男は生前における自己の果たした救済者としての使命を放棄すること、そして自分自身の生を當むために「1人」になって孤独の中に身を置く決意をする。



「しかし私は今やそれ（自己の使命）が終ったことを嬉しく思う。私の干涉の日々は終ったのだ。説教者、救済者としての自分は今や私自身の中で死んでいる。今や私は私自身の仕事に関わりをもち、私自身のただ一つの生（my own single life）を生きることができるのだ。」<sup>17)</sup>

この「私自身のただ一つの生」を生きようとする男にみられる態度は、「全き幻滅のもつ巨大で空疎な嘔吐感」（p.8）、生前自分が救済しようとして苦しんだ人間社会への「嘔吐」であり、マグダラのマリアに出合った時に語る *noli-me-tangere*（我れに触れるな）という言葉に表明される他者への干涉の拒否と自己の孤独への沈潜である。男がこの自我の徹底した孤独、他者との関わりへの嘔吐から解放され、真の生に復活すること、即ち「肉体の大いなる生」（the greater life of the body）（p.17）に至るには何が必要なのであろうか。その解答を我々は第二部において見出す。だが我々は既に、この解答を『チャタレイ夫人』において扱っている。『死んだ男』第二部は、いわば『チャタレイ夫人の恋人』のテーマの延長上において考えられる。『チャタレイ夫人の恋人』において中心は女性主人公コニーの精神的な死からの再生を「森の守護者」メラーズによって果たすことであつたのに対して、『死んだ男』ではイエスらしき男性主人公は「古代エジプトの異教神」であり復活、再生の女神イシスに仕える巫女によって真の復活を果たす形をとっている。

1929年 L. E. Pllinger に宛てた手紙の中で『死んだ男』（別名『逃げた雄鶏』）について述べているロレンスの言葉と、同じ頃に書かれた「復活せる主」（‘The Risen Lord’）という散文の一節は、この『死んだ男』と『チャタレイ夫人の恋人』を関連させて考える論拠となるものである。それぞれを次に引用してみよう。

「とにかく『逃げた雄鶏』（*The Escaped Cock*）の原稿を受けとってほしい。それは僕の最良の作品の一つなのだ。教会の教義は肉体の復活を教えている。そして、もしそのことが全的な人（the whole man）を意味しないとすれば、何を意味するというのか。そして、もし男が女なくして完全（whole）であるとすれば、僕は非難されてもよい。いや、君が間違っているのだ。」<sup>18)</sup>

(下点筆者)

「もしイエスが全的な人 (a full man) として、即ち完全な肉体と魂を備えた人として復活したのならば、イエスは自らの肉体に女を抱き、女とともに生き、そして彼女との一対的結びつき (twoness) によるやさしさ (tenderness) と開花の様を知るために復活したのだ。」<sup>19)</sup> (下点筆者)

「肉体の復活」とは「全的な人間」になること、精神に冒された弱き肉体ではなく、血の脈々たる流れを感知する肉体をもつ人間になることに他ならない。それには自己と全く異質の自我をもつ異性との「やさしさ」に基ずく関係を確立すること以外にない。イエスの復活もかくあらねばならない。ロレンスは『チャタレイ夫人の恋人』において既にこのテーマを現実の英国社会に生きる男女によって描いている。しかしながら『死んだ男』では、その背景は現実の世界から時間的にも空間的にもかけ離れた神話世界、古き異教的コスモスが生きている世界であり、イエスと思われる男とイシスの巫女との交わりを描く描写法は、『チャタレイ夫人の恋人』におけるコニーとメラーズの交わりを描く方法と比べた場合、遙かに ritualistic になっている。この二作品の間の橋渡しの役割をなしていると考えられる「『チャタレイ夫人の恋人』にことよせて」という論文の中でロレンスは男女間の真の性のあるべき姿を次のように述べている。

「人間の中にある真の性 (the real sex) は四季のリズム、年周期のリズムを有している、即ち冬至のもつ危機感と復活祭のもつ情熱を……。」<sup>20)</sup>

「真の性」は四季のリズム、コスモスのリズムと呼応するリズムをもっていなければならない。なぜなら人間の感情のリズムは年周期のリズムと一致し、結婚のリズムもまた然りであるとロレンスはいう。<sup>21)</sup> かくてロレンスは真の男根的な男女の結びつきを通して古代異教人達がもっていた「律動的コスモス」(the rhythmic cosmos)、「生きたコスモス」(the living cosmos) との交流、触れ合いを取り戻すことが、孤独で疎外感に悩む現代人の意識を救う道であると信じたようである。

人間の、男女の営みが自然界の太陽、月、地球、星の周期、コスモスの生成

と消滅のリズムと一体化しうる世界とは、直線的な時間観の中にしか身を置こうとしない現代人には、もはや遙かなる過去の世界、全く空想上の産物以外のものではないであろう。それ故に、『チャタレイ夫人の恋人』にみられた不満も、物語の背景が現実世界と隔った神話世界となっている『死んだ男』の場合には生じないわけである。『死んだ男』第二部における男の復活直後の言葉をこうしたコスモスとの一体化を描いた一例として引用してみよう。

「これこそ偉大なる穢い、触れ合いにおける実存 (the being in touch)。灰色の海、雨、湿ったナルシスの花、私が待ち望む女、目に見えないイシス、そして目に見えない太陽、これら総てが触れ合い、一つになっている。」(p. 44) 自然界に存在する万物が互いにやさしく触れ合い、交流し合い一体化 (oneness) に至っている。これこそロレンスが晩年に見出した己れのユートピアであった。男の存在は結末に近づくに連れて自然の四季のリズムと同化し、秋の終りとともに、2人の結実としての子供(秋の実りの証)を女の体内に宿して去るが、別離はもはや問題ではない。春の巡りとともに男の存在はまた巡り来るのだから。男は云う、「ナイチンゲールが再びお前の谷底で鳴く頃には、私はまぎれもなく春のようにまたやって来よう。」(p. 46) と。この描写は『チャタレイ夫人の恋人』における結末、即ちメラーズがユニーに宛てた手紙の言葉、「真の春が来て、一緒に住み交わる (drawing together) 時が来れば、その時僕達はこの小さな焰を輝く白熱に燃え立たせることができるのです。」

(p. 363) を我々に思い起こさせてくれる。この男と同様、メラーズも来るべき「春」、結実の春にユニーとの再会を約している。メラーズとユニーの間にゆらめく生命の焰は四季のリズムと呼応するのである。

## 5

我々はこれまで『島を愛した男』『チャタレイ夫人の恋人』『死んだ男』を一つの線上に置いて検討してきた。それはロレンス自身が内にもつ「孤立感、孤独感」をいかに解消させようとしたかを探る過程でもあったといえる。

ロレンスが死の真際になって抱いた自己のユートピアについて知りたいな

ら、『チャタレイ夫人の恋人』にことよせて」や『エトルリアの遺跡』(Etruscan Places), 『アポカリプス』(Apocalypse)等を読めばよい。自我に縛られ、孤独に苦しむ現代人に対してロレンスは、『チャタレイ夫人の恋人』にことよせて」の中で、「人間は人間だけでは生きられないものであり、太陽、月、地球と共に生きる必要がある」<sup>229</sup> こと、即ち生けるコスモスのリズムに回帰して行くことを提唱する。これは『アポカリプス』の中でさらに明確化され、コスモスと共に生き、コスモスと一体となって(We and the cosmos are one.)<sup>230</sup> 生活する古代異教人の生き方への限りない憧れとなっている。

「我々が願うのは今の我々の偽りの、非有機的な(inorganic) 関係、とりわけ金銭に結びついた関係を打破し、コスモスとの、太陽や地球との、人類や国家や家族との、生き生きとした、有機的な(organic) 関係を再び取り戻すことである。」<sup>231</sup> (下点筆者)

総てのものを包含し創造と崩壊の円環的サイクルを繰り返すコスモスとの「有機的な」結合、その典型を我々は小説作品としては『死んだ男』等の中に見てきた。『チャタレイ夫人の恋人』において、メラーズが金銭に縛られた「非有機的な」社会との関係を拒否したことも、コニーが階級を超えて森番を選んだことも、そして2人が農耕生活に2人の未来を託そうとしたことも、結局はこうしたコスモスとの有機的な結びつきをロレンスが描こうとしたからに他ならない。こうした生き方とは人間の生と死(即ち運命)のリズムを宇宙のリズムから切断することではなく、宇宙のリズムと一体化させてしまうことであった。『島を愛した男』の主人公が結末において「我々は(コスモス)の諸要素(the elements)に打ち勝つことはできないんだ。」<sup>232</sup> という反省的な言葉を洩らしたことを思い起こせば、この男の失敗とは結局自然的コスモスに逆って己れ自身の世界の中に生きようとしたことにあったといえる。『最後の詩集』(Last Poems)に納められている「死の舟」(‘The Ship of Death’)や「ババリアのリンドウ」(‘Bavarian Gentians’)のもつ安らかなリズムと落ち着いた死の受容と再生への願望の中にみられる生への脈動の秘密も、<sup>233</sup> こうしたコスモスのリズムとの有機的結びつきを信ずる作者の限りないオプティミズムに

あったといえよう。

註) 本稿で使用したテキストは総て Phoenix edition (London, William Heinemann Ltd.) に依っている。

- 1) Ford, *Double Measure* (New York, 1964), p.66.
- 2) 'Apropos.', *Lady Chatterley's Lover*, Phoenix ed., p.40.
- 3) *Ibid.*
- 4) Moynahan, *The Deed of Life* (London, 1963), p.224.
- 5) 'Apropos.', p.40.
- 6) *The Complete Short Stories of D. H. Lawrence*, Vol. II, p.551.
- 7) *Ibid.*
- 8) *The Complete Short Stories of D. H. Lawrence*, Vol. III, p.722. 以下『島を愛した男』についての本稿における引用頁は、この版に依る。
- 9) Scott Sanders, *D. H. Lawrence : The World of the Major Novels* (London, 1973) の中で Sanders は『チャタレイ夫人の恋人』にみられる 'fertility myth' や 'Eden myth' の変形的構造を指摘する (p.200).
- 10) *Lady Chatterley's Lover*, Phoenix ed., p.63. 以下『チャタレイ夫人の恋人』についての本稿における引用頁はこの版に依る。
- 11) Sanders, *op. cit.* 参照。なお H. M. Daleski, *The Forked Flame* (London, 1965) も『チャタレイ夫人の恋人』には complexity という小説に必要な条件が欠如していると指摘しているが、これも暗にこの小説における構造上のリアリズムとシンボリズムの遊離を指していると思われる (p.266).
- 12) *Collected Letters of D. H. Lawrence*, Vol. II, p.687.
- 13) Sanders, *op. cit.*, p.169.
- 14) この手紙の中で 'hero', 'leader' を中心に置く 'the leader-cum-follower relationship' を廃棄して 'some sort of tenderness' の関係を唱えている (*Collected Letters.*, p.1045).
- 15) *Collected Letters.*, p.1110.
- 16) ロレンスは現在ある *Lady Chatterley's Lover* に至るまでに三回改稿しており、第一稿は *The First Lady Chatterley's Lover* として出版されている。
- 17) *The Short Novels of D. H. Lawrence*, Phoenix ed., Vol. II, p.13. 以下本稿における『死んだ男』についての引用頁は、この版に依る。
- 18) *Collected Letters.*, p.1115.
- 19) 'The Risen Lord', *Phoenix II* (London, 1968), p.574.
- 20) *op. cit.*, p.24.
- 21) *op. cit.*, p.29.

- 22) *op. cit.*, p. 35.
- 23) *Apocalypse*, p. 25.
- 24) *op. cit.*, p. 104. なを『アポカリプス』を中心に D. H. ロレンスのコスモスの思想史上の意義をキリスト教的歴史観との対比において論じた拙稿, 「D. H. ロレンスのコスモス—その思想史上の意義を求めて」, 天理大学『学報』第90, も参照されたし。
- 25) *op. cit.*, p. 746.
- 26) *The Complete Poems of D. H. Lawrence*, Vol. II 参照。